

「夢に向かって走るといふこと

唐沖 大助

人は夢を見続ける。そして彼もまた、同じ。

ある朝、一人の男は気づいた。唐突にやってきたそれに。そして、それから逃げることは簡単ではない。

抗うこと数分。どうしても拭いきれないこの欲求を抱え、彼は家の外へ飛び出した。あまりの勢いに、いつも持ち歩いているポーチと腕時計を忘れていたことには気づけないのだった。

風を切る。曇天の下、一人の男が自転車で疾走する。カモシカのように腿を張らせて。時速三十キロメートルを下回らないよう気力を振り絞って。

空を滑降する。勢い余って石に躓き、凄まじい勢いで空中へと放り出されたからだ。彼の姿は大空を羽ばたく鷹のように見えた。乗っていた自転車は川へ飛び込むほど彼の走行はクレイジーだった。目撃者は、いない。

彼は喜びを感じていた。勿論その事故にはではない。転ぶ瞬間に受け身をとって、怪我を最小限に抑えられたことだ。しかし、すぐに彼は思考を切り替え走り出した。起きてからふくらみ続ける欲求は、彼を高速のスプリングターへと変貌させていたのだ。

十分は経つだろうか。今まで全速力で走り続けていた彼は、妙案を思いついたらしく、ニヤニヤしていた。彼は、近道である裏道を使うことを考えたのだろう、細い道へと足を向けた。今の彼には相棒である自転車がいない。今なら行けると彼は信じた。

フェンスを登る。跳躍する。階段を駆け上る。どんな障害も今の彼には無意味だった。

彼の体力は限界に来ていた。どれほどのアドレナリンが分泌されていても、運動不足気味であった彼の体にとって今日の活動は過稼働すぎた。目に留まった小さな神社で休憩がてら無人販売のおみくじを一つ買う。吉。賽銭箱を蹴っ飛ばした。

時間はまだあるのだろうか。しかし、彼にそれを知る

術はない。

最後まで諦めてはならない、今走らないでいつ走る！
そう心に言い聞かせ、走り続ける彼に一条の光が差し込むのだった。

……ゴールが、見えたのだ。

最後の力を振り絞り、彼は辿り着いた。そこは、その筋には有名な店の前だった。店のシャッターはまだ開いていない。間に合ったことに安心したのだろう。彼はそこにへたり込んでしまった。

十分は経っただろうか。シャッターの上がる機械音がし始めた。客は自分一人。独擅場だ。

「おばちゃん。スクラッチ十枚！」

清々しい声が周りに響き渡った。彼は、サンタからプレゼントをもらった無垢な少年のような笑顔を湛えていた。

だが、店内を覗いた途端彼の表情は暗くなった。

親の財布からプレゼントの領収書でも見つけたかのような表情のまま、

「あ、そうだ。人類……滅んだんだっけ」

「お金があつても無駄じゃん！」

彼は絶望した。

……という所まで思い出したんだ。」

「誰かこの夢の続きを教えてくれ、と」

これが私の日記帳。ダイアリー机の一番上の引き出しに大切に仕

舞ってあります。